様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月 22 日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20510222
研究課題名（和文）ディアスポラとしてのニューヨークのハイチ系住民に関する学際的研究

研究課題名（英文）A Interdisciplinary Study on the Haitian Diaspora in New York

研究代表者
村田　勝幸（MURATA KATSUYUKI）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70322774

研究成果の概要（和文）：
本研究は、1960 年代以降、アメリカ合衆国、なかでも特にニューヨークへと渡ったハイチ人移民とその子孫を対象に、かれらの特殊な社会的な位置や、かれらと人種を同じくするアフリカ系アメリカ人との関係、さらには他の西インド諸島系住民との関係を、ディアスポラという概念を軸に多角的・学際的に分析することを目的としている。

研究成果の概要（英文）：
This study aims to make an interdisciplinary inquiry into Haitian immigrants who came to New York City since the late 1960s and their descendants. Especially from the perspective of the notion of “diaspora,” I put my analytical emphasis on their specific social position in New York City and their historical relations to two groups, African Americans and non-Haitian West Indians, both of whom have been presumed to share the same racial category as “blacks.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：アメリカ史・アメリカ研究
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：北アメリカ・移民研究・ニューヨーク・人種

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、西半球諸国・諸地域からアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）にやって来た移民に関して研究を行ってきた。そこで明らかとなったのは、「アメリカ人性」というものが人種やエスニシティなどと連動しているという事実であり、そうした連動性が、出身国・出身地域の状況やアメリカとの国家間関係を含めた外的要因、さらには受け入れ社会の構造によって規定されつつ歴史的に変化するという事実であった。本研究プロジェクトで本格的に取りあげる、ニューヨークのハイチ系住民は、「黒人であり、（黒人の）外国人であり、ハイチ・クレオール話者である」という三重の周縁性を背負った存在である。その意味で、まさに上述の連

動性を集中的に体現した存在である。加えて重要なこととして、アメリカのハイチ系住民についてはこれまで体系的な分析がなされておらず、本研究プロジェクトには高い学術的な意義があると考えた。

以下では、本研究プロジェクトの内容説明へと橋渡しするために、「背景」ないし「前提」となる事実を簡単にまとめておきたい。

流入ハイチ人の性質は、本国ハイチの政治社会状況によって規定されてきた。1957 年にフランソワ・デュヴァリエが大統領となり、独裁者として圧政を行うようになると、まず上流層がアメリカなどへと逃れていった。1964 年以降は、ジャーナリストや医者などの中流層がこれに加わった。さらに 1971 年、フランソワ・デュヴァリエの死後大統領となった息子のジャン＝クロード・ドュヴァリエが圧政を継続・強化したため、庶民層のハイチ人までもが国外に流出した。同大統領は 1986 年に反政府クーデターによって政権から追われたが、その後、軍事政権による強権的な統治期（～1990 年）、民衆の熱狂的な支持を受けたジャン＝ベルトラン・アリスティド神父の大統領選出（1990 年）、軍部のクーデターによるアリスティドのアメリカ亡命(1991 年)、米軍のハイチ侵攻（1994 年）、・・・アリスティドの帰国と大統領への再選（2000 年）、そしてアリスティドの再失脚（2004 年）と、ハイチは絶えざる困難に直面し続け、そのたびに大量のハイチ人が国外に流出した。

アメリカの移民難民政策もまた、ハイチ人の運命を左右した。アメリカにおいては長らく、「難民」および「政治亡命者」は「共産主義国家から逃れてきた者」とほぼ同義であった。共産主義キューバと対立する親米国家であった二人のデュヴァリエ政権期と、その直後の動乱期のハイチからの流入者が難民や政治亡命者として認定されなかったのもこうした理由による。たとえば、1981 年から 1990 年までに 2 万 2940 人が米国沿岸警備隊に捕らえられ、ハイチに戻されたが、米国への亡命資格を得たものは 11 人のみであった。これは、キューバからの流入者が難民や亡命者として多く受け入れられたのとは対照的である。1991 年に新大統領のアリスティドがクーデターで政権を追われた後、ハイチからの流出者は急増したが、当時のジョージ・ブッシュ大統領は亡命審査のために一時留め置くという手続きを廃止し、原則としてハイチに送還するという処置をとるようになった。このような流入ハイチ人の高圧的な排除の背景には、かれらの大半が「黒人」であるとの事実があった。

ここで本研究プロジェクトに関わって重要なのは、これまでに多くのハイチ人が合法移民としてニューヨークなどへと渡っていったという事実である。たとえば現在、ニューヨークにおいてハイチ系住民はカリブ海地域からの黒人移民のなかでジャマイカやドミニカ共和国出身者についで多く、40 万人以上がブルックリンを中心に集住しているといわれる。さらに、アリスティド大統領が失脚した 1991 年以降、ハイチからの流出者が急増傾向にあること、また公式の統計には反映されていない非合法な移民が多くいることを考えれば、ニューヨークの「黒人」コミュニティにおいてハイチ系住民のプレゼンスは拡大傾向にある。

以上が本研究プロジェクト開始当初の背景であり、踏まえるべき前提的な事実関係である。

２．研究の目的

本研究プロジェクトの大枠的な狙いは、これまでアメリカにおいて「ボートピープル」というように周縁化されることが多かったハイチ系住民の歴史的な経験が持つ意味を学際的な観点から再検討することである。ニューヨークのハイチ系住民を対象とする本研究では、ディアスポラという概念を鍵に、ハイチ系住民の経験が提示しながら、これまで多くの研究が取りこぼしてきた以下のような論点を、歴史学や社会学、人類学、文化研究の方法論を相互補完的に援用しながら検討した。具体的には、①関連する先行研究の批判的分析を通して、ニューヨークのハイチ系住民がグローバルに拡散するハイチ人全体のなかで歴史的にいかなる位置づけにあるのかを明らかにし、②ニューヨークのハイチ系住民が置かれている人種・エスニックな面での特殊性という論点を、ハイチ系住民のアイデンティティの多層性、他の「黒人」集団との関係、さらには人種主義的な暴力の経験や文化的交渉ないし変容の諸相などから明らかにすること、を中心的研究目的とした。

３．研究の方法

本研究プロジェクトは、大きく先行研究の批判的検討と、一次資料の収集および分析を目的としたニューヨークへの現地調査の二つを柱とした。

ハイチ系住民のアイデンティティや日常生活のありようは、受け入れ社会の人種・エスニックな状況の影響を強く受けてきた。たとえば、かれらの多くは、ニューヨークに移り住むことで、「黒人」として自らを再規定する必要に迫られたのである。こうした点を

踏まえ、まず、ハイチ系住民の日常を取り巻くニューヨークの人種・エスニック関係を（1960 年代後半以降の状況を中心に）扱った先行研究に関する批判的な再検討を行った。ただしその際、現地調査と密接に関わる論点、つまり「ハイチ人であることの意味」や「黒人集団内部の多様性と連帯」、「人種主義的暴力への反応」、「ハイチ文化の浸透」などの論点にとりわけ重きを置いた。

続いて、上記の成果を踏まえながら、現地調査を行った。一次資料の収集および分析を中心とした現地調査での具体的な調査項目は以下の通りである。

＊アフリカ系アメリカ人との関係は？ハイチ系としてのエスニック・アイデンティティと「黒人」としての人種意識はどのように調停されてきたのか？総じて、内的な多様性（エスニシティ）と人種連帯はどのような関係にあったのか？

＊旧英領西インド諸島系住民との関係は？カリブ海地域出身という共通性はどのような瞬間に生まれたのか？ハイチ・クレオール語話者という特殊性はそうした共通性にどう影響しているのか？

＊「黒人」を標的とした人種主義的暴力、とりわけニューヨーク市警による残虐行為に対峙するなかで、アフリカ系アメリカ人や西インド諸島系住民との関係はどう変化したのか？「アフリカン・ディアスポラ」という意識はその際共有されているのか？等々。

なお、一次資料としては、ニューヨーク公立図書館ショーンバーグ研究図書館分館所蔵のハイチ系新聞（*Haiti Observateur, Haitian Times* など）や「黒人紙」（*New York Amsterdam News*, *New York Carib News*, *City Sun* など）、その他の新聞（*New York Times*, *Newsday*, *New York Daily News* など）の関連記事に加えて、ニューヨーク市公文書館所蔵の一次資料（デイヴィッド・ディンキンズ文書やルドルフ・ジュリアーニ文書など）を使用した。また、ニューヨーク州やニューヨーク市刊行の調査報告書や統計資料、さらには現地雑誌（*Village Voice* など）も幅広く参照した。

４．研究成果

まず、「ヘイシャン・ディアスポラ」や「アフリカン・ディアスポラ」という理論的枠組みと 20 世紀終盤のニューヨークという歴史的・社会的状況に関する実証分析を接合するために、1990 年から一期 4 年間、ニューヨーク市長を務めたデイヴィッド・ディンキンズに関する論文を、現地調査で得た一次資料を基に執筆した。「ニューヨーク市初の黒人市長」であるディンキンズの任期中に起こったクラウン・ハイツ暴動（1991 年 8 月）は、彼が市長の地位にあった四年間を人種・エスニック関係の面で強く特徴づけたと言われる。ハイチ系住民を分析対象とする本研究プロジェクトにとって、「黒人」としての人種連帯と内的多様性の関係を考えるという点で、クラウン・ハイツ暴動に関する実証的な論考は重要な基盤となっている［村田勝幸「〈人種の調停者〉の憂鬱――デイヴィッド・ディンキンズとクラウン・ハイツ暴動」『アメリカ史研究』第 32 号（日本アメリカ史学会、2009 年）、87-106 頁］。また、現地調査で集めた一次資料も参照して、2009 年 10 月には、ニューヨークのクイーンズで 1986 年に起こった西インド諸島系住民を標的とした「憎悪犯罪」事件、ハワード・ビーチ事件に関する論考を公刊した［「『ハワード・ビーチよ、聞いてるか？ここはヨハネスブルグじゃないんだ！』――暴力、人種種主義、多様な『われわれ』」金井光太朗編『アメリカの愛国心とアイデンティティ』（彩流社、2009 年）］。

2010 年 8 月と 2011 年 3 月に行った現地調査では、1990 年代から 2000 年にかけてニューヨークのハイチ系住民を標的として発生した警察の残虐行為の事例（1997 年のアブナー・ルイマ事件と 2000 年のパトリック・ドリスモンド事件）について、一次資料の収集をニューヨーク公立図書館ショーンバーグ研究図書館分館で行い、あわせて事件現場の視察を実施した。ニューヨークのハイチ系住民にとり、この二つの事件は同地において「ヘイシャン・ディアスポラ」であるのみならず、「アフリカン・ディアスポラ」であることも痛感させる出来事であった。この点は、現地調査で収集した一次資料、とりわけハイチ系住民がニューヨークで発行しているエスニック・ペーパー（*Haiti Observateur, Haitian Times* など）の記事や投書からも確認することができた。なお、中間報告の意味も込めて、ここまでで明らかにした成果を、2010 年 9 月 20 日に行われたアフリカ系アメリカ人コミュニティ形成史研究会において、「〈ヘイシャン・ディアスポラ〉から〈アフリカン・ディアスポラ〉へ――21 世紀転換期ニューヨークにおける警察暴力が構築する人種連帯」という標題の口頭報告のかたちで発表した。

同研究会における報告とオーディエンスを交えた議論を踏まえて、以下が今後さらに分析を加えられるべき論点として明確化した。

＊ハイチ系住民の多くは、ニューヨークにおいてその人種性（黒人性）ゆえにニューヨーク市警（NYPD）の標的とされるなかで、自らのエスニック・アイデンティティをどのように変化させていったのか。

＊アフリカ系アメリカ人や他の西インド諸島系住民と〈黒人〉としての意識をどのよう

に共有したのか。
＊ハイチ系住民を標的とした警察の残虐行為は、ニューヨークの黒人全体の間で「わたしたちの歴史や経験」に関わるものとしてどのように集合的に記憶されていったのか。
　以上の論点に対する実証的な解答が、最終年度（2011 年度）に発表した論文と著書である。
　まず、「ヘイシャン・ディアスポラからアフリカン・ディアスポラへ――警察の残虐行為が構築する人種連帯のかたち」（樋口映美編『流動する〈黒人〉コミュニティ――アメリカ史を問う』彩流社、2012 年）では、ハイチ系住民を標的として発生した警察の残虐行為の事例、アブナー・ルイマ事件（1997 年）とパトリック・ドリスモンド事件（2000 年）に関して実証的な分析を行い、この二つの事件がニューヨークのハイチ系住民にとり「アメリカに住むハイチ人」から「ハイチに出自をもつアフリカン・ディアスポラ」へと自己認識の軸を移行させる契機となったことを明らかにした。ニューヨークのハイチ系住民は、「黒人」としての人種性を理由に NYPD による残虐行為の標的とされるなかで、自らのエスニック・アイデンティティを「黒人」としての自己認識と両立・調和するかたちで再構築していったのである。
　続く（単著）『アフリカン・ディアスポラのニューヨーク――多様性が生み出す人種連帯のかたち』（彩流社、2012 年）では、NYPD によるギニア人移民射殺事件、アマドゥ・ディアロ事件（1999 年）に関する分析にまで踏み込んだ。同書において、ニューヨークの「黒人」住民全体の間で警察の残虐行為が「わたしたちの歴史や経験」として集合されるとともに、アブナー・ルイマ事件、アマドゥ・ディアロ事件、パトリック・ドリスモンド事件という一連の事件に対して抗議の声をあげ、抵抗主体としての自己を立ち上げることを通して、ニューヨークのハイチ系住民がアフリカ系アメリカ人やハイチ系以外の西インド諸島系住民と「黒人」としての人種意識を共有していくプロセスを描き出した。また、定住化傾向を強めるなかで、ハイチ系住民の「ディアスポラ」としての自己意識は、「本国ハイチ」を軸としたものから（黒人性の「起源」とも言える）「アフリカ」を軸としたものへと重点を移していったのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①村田勝幸「〈人種の調停者〉の憂鬱――デイヴィッド・ディンキンズとクラウン・ハイツ暴動」『アメリカ史研究』第 32 号、87-106 頁、2009 年、査読有

〔学会発表〕（計２件）
①村田勝幸「寛容性を失うアメリカ社会と移民管理――アリゾナ移民法（SB1070）の歴史的背景」、GCOE「境界研究の拠点形成」、2011 年 2 月 15 日、北海道大学スラブ研究センター（札幌市）
②村田勝幸「〈ヘイシャン・ディアスポラ〉から〈アフリカン・ディアスポラ〉へ――21 世紀転換期ニューヨークにおける警察暴力が構築する人種連帯」、アフリカ系アメリカ人コミュニティ形成史研究会、2010 年 9 月 20 日、専修大学神田キャンパス（東京都千代田区）

〔図書〕（計３件）
①村田勝幸、彩流社、『アメリカの愛国心とアイデンティティ――自由の国の記憶・ジェンダー・人種』（金井光太朗編）、2009 年、191-210 頁
②村田勝幸、彩流社、『流動する〈黒人〉コミュニティ――アメリカ史を問う』（樋口映美編）、2012 年、203-233 頁
③村田勝幸、彩流社、『アフリカン・ディアスポラのニューヨーク――多様性が生み出す人種連帯のかたち』（単著）、251 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
　村田　勝幸（MURATA KATSUYUKI）
　北海道大学・大学院文学研究科・准教授
　研究者番号：70322774

(2)研究分担者

　　なし

(3)連携研究者

　　なし